

一八世紀の「ドイツ民族」?

——事典・辞典類の記述を素材として——

山 田 欣 吾

「[1] 19世紀もドイツといふ獅子 (der deutsche Löwe) は眠っていた。……それはもはや、民族なるもの (ein Volk) が何をなしうるかを忘れていた。……〔だがいまや〕それは目を覚まし、枷をうち砕くだろう、そして、それは、自らを術策と悪業の罠につないできた者たちの無価値と無惨とを怖しくも見事にあばくだらう。しかし、ドイツ民族よ、神は汝に愛と信頼を与えるだらう、そして、汝は自らが何者であり何者たるべきかを知るだらう。……〔²〕 ドイツの男よ! いわ、自

由と誠実をもって隸属と偽りに抗して立ち上ろう! ……然して、かかるフランス人を恐れることがあろうか。……まことに、フランス人のもとには薄き明りしかないのに對し、汝は燃えさかる炎を持つ。かれらのもとには巧みさしかないのに、汝は力を持つ。かれらには欺瞞しかないのに、汝には誠実がある。……汝は、風が羽毛を吹き飛ばすように、かれらを吹き飛ばすだらう⁽¹⁾。

E・M・アールントが、非常に広く読まれた『ドイツ兵士のための教理問答』(一八一三年) のなかで兵士にむかって右のように書いたのは、J・G・フィヒテが、ベルリン大学の講堂から「ドイツ民族にむか

つて」自らの尊厳の自覚を呼びかけてから五年後の(2)とであった。そして、まさにその年、プロイセンを中心とする連合軍は、ライプツィヒ近くでナポレオンの軍隊を決定的に破り、「解放戦争」を輝かしい勝利のうちに終らせたのであり、同時代人はこの戦いに史上初めて「民族の戦い」(Völkerschlacht)という呼称を与えたのであった。一九世紀初めのこの時期は、「ドイツ民族(deutsches Volk)」が知的エリートの観念においてのみならず、Volkなる語のもう一つの意味である「人民」のレヴァエルにおいても意識化され始める(3)画期であったとみることができる。

さて、一九世紀初め以来、ドイツの民族意識が急速に「深化・強化」されたという評価については、大方の異論はないと思われるが、筆者がいま述べたように、その時期をまさに民族意識の形成され始める画期だと見たいとなると、事は厄介になるはずである。語うまでもなく、こうした言説が成り立つためには、それ以前における民族意識の未形成という認識が何らかの形で示されていなければならぬからである。この点で、

一橋論叢 第110巻 第4号 平成5年(1993年)10月号 (132)
(133) 一八世紀の「ドイツ民族」?

sche(ドイツ人)という語に向うことになるのだが、その前に、この事典が Volk, Nationといった基礎概念をどう扱っているかに目を配っておくのも無駄ではない。

“Volck”という語は第五〇巻(一七四六年)の三六二—三七五欄にわたってかなり詳しく記述されている。それがラテン語の Populus にあたるとの指摘に続いて、まず、概念の一般的な内容をつきのようについている。すなわち、キクロ、アウグスティヌスはそれを、「多くの、ないし一団の人々のことで、しかもすべての人が互いに一つの法によって利益を享受するか、または共通の善のために結集し、一種の社会を設立したものの」としているが、「そもそも Volck とは、多くの人の集まりを意味する」のであって、それは何となく出来上ることもあるし、福祉を促すために意図して結合することもあるし、上から集められること(例えば領邦君主の兵士)もある、と。Volck 概念は基本的に、ほとんど「人の集団」というほどの意味におさえられていくわけである。ここから話は一気に、そうした人の集

団がそもそもこの世に現れた最古の姿いかんということに向い、人の起源についての異教的神話を退けるとともに、創世記などの素材に基づきつつ、ノアの三子から世界の諸民族(Völker)が出現する過程が延々書きつらねられる。やがて、探検家、航海者のしばしば信用ならぬ報告などと批判的に対決しながら、世界には神を知らぬ諸民族、さまざまの宗教を信ずる人々がいること、さまざまの習俗(Sitten)があることが述べられる。しかし、人々の習俗を不变のものと見る考えは「迷信だ」として退けられ、その変化にこそ歴史の秘密を見るべきことが主張される。だから、為政者はよき習俗を作り上げるために心を碎かなければならず、他の諸民族との交流はそのために大いに役立つのだ、として、ザクセン人(+)がボーランド人、ロシア人、オーストリア人(+)との交流から得た善き事などが強調される。そして、最後に、諸民族の違った習俗を生み出す要因として、一般的に、気候風土、飲食物、血(Geburt und Geblüte)、教育および交流がそれぞれ指摘されて Volck という語の説明が締めくく

ます、一八世紀ドイツで作られた最初で最大の百科事典、J.J.H.ツェドラーの『世界学術・芸術大百科事典』(六八巻、一七三一—五四年)から始めよう。(4)この百科事典には、目指す「ドイツ民族(deutsches Volk)」という見出語は見当らない。Deutsche Völker(ドイツ諸民族)という不思議な項目が目に入るが、そこには「Teutscheを見よ」という参考指示しか書かれていらない。そこで、われわれもそれに導かれて Teut.

られる。

フォルクは、ここではせいぜい習俗を異にする人間の集団として「民族誌」的次元でとらえられるのみで、言語・文化の共通性が特に指摘されることもなく、ラテン語のポップルスが含む政治的色彩も意識されることはない。そうしたフォルクの一つとして「ドイツ人」も数回言及されているが、それは、一つには、個々の習俗の違いという話題について「ドイツ人」をフランス人、イタリア人、オランダ人などと同レヴェルで対比する場合と、また、もう一つには、タキトウス時代のゲルマン諸民族が一括して（しかも必ず）「ドイツ人」と呼ばれる場合に用いられるだけである。また、ここで同時代のヨーロッパが問題になるとき、ロシア人、ドイツ人、フランス人、イタリア人などのみが Volk なのではなく、ザクセン人、メックレンブルク人、シュヴァーベン人、オーストリア人、マイセン人、ブラウンシュヴァイク人などを Volk としてとらえられ、論じられていることか、この概念内容を押さえ上に見逃すことの出来ないところである。

一橋論叢 第110巻 第4号 平成5年(1993年)10月号 (134)

より忠実に、また、出自や習俗を共通にする人間集団として理解されている。そして、一九世紀以降の言葉の中心語義をなす政治的意味をそこに嗅ぎ出すことには全くできないのである。

もし、Teutsche という大項目（第四二一卷、一七七四年、一六八〇—一七三一欄）に向かおう。執筆者はまず、この語を、ラテン語の Alemanni, Teutones にあたり、「彼らのむしろ特別の勇敢をもつて名のある大民族 (grosses Volck) の」といつて、その中に多くの他の民族を含む」と規定したが、Teutsche の起源、名称、「各種の“ドイツ人”」政体、法・刑罰制度、軍制、家生活、気質、結婚、埋葬、宗教といった順番で非常に手広く記述を行う。しかし、極めて特徴的なことに、その内容は事実上、一貫してゲルマンの古事に終始しており、われわれの期待する同時代の「ドイツ民族」などには全く触れることがない。

すぐ後で述べるように、この項目の筆者にとっては、古代の著者がゲルマン諸族に数えたものがことごとく Deutsche なのであるが、その起源と名前の由来を

Nation から概念(第一二三卷、一七四〇年)の説明

ははるかに簡潔である。Nation とは「本来の第一の意味からすると、同一の慣習、習俗、法律をもつまとまつた数の市民をさう」。したがって、地球上の大小の居住地域が、既 Nationen の単位をなすのではなく、「この違いは専ら生活様式と慣習の差に基づくものであるから、しばしば小さな地方の中にも Nation を異なる人々が住んでいることがある」。例えば、四方をドイツ人 (Deutsche Nation) に囲まれて狭い地帯に住むヴュント人を想え。「Nation という語は、ある地域に居住するところの、本来は Volk (Populus) といわなければならない。しかし、「Nation という語は、Volk についても用いられるという慣用が早くから始まった」。だがそれでも、フランスの地でドイツ人の両親から生まれた子供はやはり Deutsche Nation に属すると見なければならない、ということである。つまり、このやの Nation は、ラテハ語 (natio) の語義に

巡ってこの筆者が次々に並べたて検討する諸説は、ルネサンス期に古代作者のテキストが発見されて以来提起されて来たその解釈の総まくりであり、ここでそれ立ち入る意味はない。むしろ興味深いのは「ドイツ人」なる語のもとで何が考えられているかということの方である。それは大きく五つの主要グループに分けられ、さらにそれぞれのグループのもとに多くの民族 (Völker) の名前が列挙される。五つの大グループとは、Wandalen, Ingävones, Istvaeones, Hermiones, Bastarnä である。筆のものを除いて、他の名前はいずれも一応タキトウスに由来する。

① Wandalen は、おそらく後代の構成になる分類であつて、ヨーローツ族、ランガバルド族、ブルグンド族、ヴァンダル族、それにアンゲルン族など「古き父祖の地を去つてフランス、スペイン、シチリア、アフリカなどに移り住み、そこでうまく町を立て得なかつたもの」たちのことである。② Ingävones は北方系の諸族で、ザクセン族、キンベルン族、スヴェオーネン (スウェーデン) 族、シーネス (ノルウェー) 族などを

含む。③ タキトウスが「その他の諸族」と呼んだ Istaevones に属するものとしては、フリーゼン族、ブルクテリー族、カマーヴィー族など一五民族が挙げられてい、同じく、④ タキトウスにより、「中間に住むもの」とやれている Herminones のグループには、ヘルムンドゥール(シュヴァーベン)族、カッティー(ベッセン)族、ケルスキ族など一四民族が数えられる。そして、⑤ 最後の Bastarnä は、一番東方に居住した諸族であって、タキトウスがそれを「ゲルマーニア族に数えるべきかどうか迷った」(『ゲルマーニア』第四六章) 民族である。また、五つの主要民族集団のほか、「ラインの向こう、旧ガリアの地には、次のようなドイツ諸民族 (teutsche Völker) が住んだ」として、トリボキー族、ネメテース族など一四民族の名が挙げられている。

以上が全部「ドイツ人」であって、こうした「ドイツ人」はすべて大小の移動を行つたから、その地理的報道を誤らないためには、古代、中世、近世の歴史を十分注目すべきことが一般的に要請されるが、その過

とで、およそ同時代の *Deutsches Reich* が枠組みを提供していることは言うまでもないが、その国制に関する形式的解説はともかく、国力、民生などの記述になると、諸国の実態を「帝国」レヴェルに集計して扱うことができるないために、ほとんど見るべき情報は得られない。

ところで、この項目の記述において、およそ「民族」なるものに視線が向いていないことは著しい特徴である。「ドイツの内部区分」の歴史を一瞥する時には、カール大帝の國(これも勿論ドイツである)をはじめ折々の國の外枠が前提され、その中のいわば行政区画(例えば「〇帝国クライズ」)が問題になるだけで、住民の民族的構成などに言が及ぶことはない。「國の性状」という部分では、地勢のほかに当然「今日の住民」が扱われるが、そこでは例の粘液質、多血質といった気質類型論を土台にして、ドイツ人は自由を愛し、勇敢で、学問に優れている等のことが述べられているだけである。しかし、そうしたドイツ人の「個性」なし「特徴」を指摘することと並んで、ドイツ人は好んで外国

程そのものについての言及は全くなされていない。したがって、項目の筆者にとつては、かれの同時代においても、大きな民族としての「ドイツ人」を云々することはできると考えていることは残念ながらできない。た

だ、太古の「ドイツ人」との関連で言えば、かつては遙かに広く分布していた「ドイツ人」のうち、長い歴史過程を通じてずっと「ドイツ人」に止まつた者が今遙かに広く分布していた「ドイツ人」のうち、長い歴史過程を通じてずっと「ドイツ人」に止まつた者が今その「ドイツ人」なのだ、というイメージがこの筆者には抱かれていたと見るのは出来るだろう。⁽⁸⁾

ツエドラーの『百科事典』から同時代のドイツについて情報を得ようとすると際に見逃せないのは *Teutschland* という項目(第四三卷、一七四五五年、二一七三一二九五欄)である。「ヨーロッパの一大国(Land)、温帯に位置する、境界、内部区分、政体その他の特色について」は、絶えず往時、近時に目を向けなければならぬ」として、ドイツの境界、ドイツの内部区分、統治諸形態、國の性状、ドイツの(國)力、宗教といふ順でその概観がなされる。「ドイツ」という言葉のも

の風を真似する傾向があること、とくに近年フランスの風俗が広く取り入れられていくことがおおらかに付

言される。項目の筆者がこの傾向に苦々しい思いを抱

いているようなニュアンスは認められない。

III

ツエドラーと並んで、一八世紀に作り始められた著名的な『百科事典』に J·G·クリュニッツのそれがある。⁽¹⁰⁾ しかし、『通商・技術百科事典』(Öconomisch-technologische Encyclopädie)と銘打つたの『百科事典』は、一七七三年に第一巻が出て以来、最後の第二四二巻が一八五八年に送り出されるまでに一世紀近くもかかっており、したがって、個々の記事の検討はどうしてもその巻の刊行年代と睨み合わせて行う必要がある。

ツエドラーの場合と同様に、まず、「ドイツ民族」をこの事典(第九巻、一七七六年、一六七頁)に尋ねると、且指す場所には該当語がないばかりか、近くにあるはずの Deutsche, Deutschland など関連語も見いだ

かいが出来なく (Deutsche といふことを同様)。

Deutsch-Gold, Deutsch-Schwarz, Deutsches Dachなどと並んで、ただ Deutsche Schule から見出語のもとで、外国人がドイツの國家全体をこう幅広く翻訳しているという短い説明がなされているだけである。なぜ

こうなのか、筆者はいま十分に説明する)とは出来ないが、おそらく一九世紀に進んでからの時代情勢の中であつたら、百科事典の編者が「ドイツ」「エイツ人」といった項目を捨うに値しないと考える)とはまずなかつたのではないかと思われる。

それはともかく、つぎに問題となるのは Nation 概念である。この巻(第一〇一巻、一八〇六年、三九三一四一五頁)は一九世紀へ越えてからの刊行であるにもかかわらず、大革命がフランスにおいてこの概念に深く刻み込んだ政治的意味は、直接的には、この説明自体にはほとんど影響を与えていない。この概念は相変わらず前政治的にとらえられており、その扱いは先に見たツェドラーの場合と基本的に同じであつて、それは、一八世紀後半のドイツにおけるこの概念の標

準的理説を示しておると考えてよい。そして、筆者のこの判断は、実は、一つの文献学的確認にも支えられているのであるが、その点は後回しにして、まずは、クリューリッシュにおける Nation の語義説明を聞けば、いうのである。

「ラテン語の Natio に由来する。共通の起源をもつ、共通の言語を話すところの、あるラント土着の住民である、そして、やや狭い意味では際立つた思考・行動様式ないし Nationalgeist (民族精神) によって他の諸民族 (Völkerschaften) から区別されるものをいう、なんど、それは單一の

国家をなすこと、多くの国家に分かれることもある。ドイツ、フランス、スペイン、イタリア、ロシア Nation^⑩ いうした Nation の個々の部分、すなわち、ある方言を話す地方住民が時に Nationen と呼ばれるが、その用法は構成員が Nationen に分かれていた昔の大学においても用いられた。この語がラテン語から借用される以前は、Nation のかわりに Volk を用いたが、昔の

Nationen といひてはなおそれが使われている。しかし、この語の多義性のゆえに大体においてそれを「Volk」かいの意味で用いることは放棄され、Nation といひ Völkerschaft なる語を導入する試みがなされてすでに大方の賛同を得ている^⑪。語義説明は、後述するアーデルンクの「ドイツ語辞典の Nation の項」(一七七七年)を一何ら断りなしに一枚書きおりて、「それに短く、しかしながら大事な追加をしただけのものである。書き加えられたのは、「やや狭い意味では際立つた思考・行動様式ないし民族精神によつて他の諸民族から区別されるものをいふ」という右の引用の傍線部分である。おそらく、この書き加え部分に、大革命以来の激動がドイツの思想状況に及ぼした影響を見て取ることは正当だと思われるが、それでもなお、ナチオンが前政治的概念にとらまつてゐる点については変りない。ナチオンは決して政治形象ではなく、しかも必ずしもエスニックに規定されているともいえない多様な言語、文化集団としてとらえられているわけである。そして、一心に

のように語義を押さえたうえで、項目の筆者は自前の記述に移り、およそ人類がナチオンに分かれるところのはなぜなのか、いかなるものがナチオンの規定要因なのかをいわば哲学的に思索^⑫ するに、National-Charakter を生み出すのに気候、風土、統治形態、宗教、教育の及ぼす影響をやはり思弁的に検討して、そして、それぞれにそれなりに重要な役割を認めつつ長い説明を終る。

いろいろで、Nation と並んでもう一つの基本概念 Volk といひは、クリューリッシュの『百科事典』第二二七巻にかなり大きい項目がある。しかし、この巻が刊行されたのは一八五五年であつて、これをツェドラーなど一八世紀のそれと一緒に扱うことはできない。概念の記述内容からしても、それはむしろ、一九世紀第二四半期以降のブロックハウスやエルシュ・グルバート^⑬と合わせて別に分析しなければならないものである。そこで、ここでは、『百科事典』の検討はひとまず打ち切り、一八世紀から一九世紀初頭の重要なドイツ語辞典の中に問題の諸概念をたずねる作業をしてみよ

う。右で実例を見たように、『言語辞典の『百科事典』に対する影響は否定できないばかりか、時代がその言葉に込める意味内容は、言葉の最も敏感な観察者、採取者によってそうした辞典の中に掬い取られているはずだと想定されるからである。

四

J・Ch・アーデルンクの『高地ドイツ語辞典』全四巻は、一七七四年から一七八六年に初版が、そして、一七九三年から一八〇一年に「大きく全面的に改定された」⁽¹⁴⁾第二版が出た一八世紀を代表するドイツ語の大辞典である。その第二版が近年復刻されて利用できるようになった。しかし、今のところ、初版を見る機会に恵まれていないので、重大な二〇年をはさんだ第二版の記述との違いかんという興味深い関心を満たすことではじめたい。

まあ、Deutsch, Deutsche, Deutschlandといった語は相互に組み合われて、それ以上説明の不要な概念として扱われている。例えばDeutschは「ドイツ人に

固有の」Deutscheは「ドイツに生まれついた者」Deutschlandは「ドイツ人のラント」という具合である。「ドイツ」は既にこの上なく自明な観念になつてゐる。しかし、「ドイツ人」が「ドイツ民族」として改めて対称化されることはなく、「ドイツ」に住む「非ドイツ民族」は果して「ドイツ人」か、というパウルス・キルヒエの国民議会(一八四八一九年)を沸かせた大問題などは、毛筋ほども意識に上ることがない。Deutschの項には注が二つ付いていて、一つは、それ自体かなり注目に値する語源の考証、もう一つは、語の綴りに関するDかTかという議論であるが、それをはじめて扱う必要はない。

(第四巻、一八〇一年、一一一四頁—一一二六欄)の方はやや複雑であり、そこには、事態の変化のなかでこの規定されていたことは、すでに上でクリューニッツによる孫引きを検討した際に考察したが、Volk概念(第四巻、一八〇一年、一一一四頁—一一二六欄)の方は

とくに、Nationという外来語が導入されてからは、Volk やその意味で用いることはなくなつたといふことである。逆に、アーデルンクによれば、「Volk は政治的結合体を表すことがあって、それは、ある君主のものに立つ限りでの多くの人——かりにそれが異なる種族(Stämme)、言語のものであっても——を指す」とある。しかし、アーデルンクによれば、「Volk とはほとんど国家臣民に近い意味で使われることもあることを指摘する。

しかし、アーデルンクにとって、この語法はドイツ語の正しい用い方とはいえない。極めて興味深いことに、アーデルンクは Volk のほかに Völkerschaft という集合名詞をとくに取り上げて説明し、「多くの割合小さい親縁的な Völker を全体としてとらえる」ときの用語、または「多くの Völker ないし Stämme から成るような Volk を表す」語としては、folk である。

アーデルンクは、さらに、われわれの理解における「民族」に最も近い Volk の語義に進む。すなわち、「共通の先祖(Stammvater)を認め、また共通の言語によって結ばれる多くの人」という意味での Volk である。しかし、ここでもまた予想に反して、こうした

語をもつて呼ばれるのは「とく古い民族(古代ユダヤ民族、ランゴバルド人、ローマ人など)」なのである。そして、言葉のこの使い方は「まだに行われてはいるが、普通の言葉使いにおいては稀になって来」とくに、Nationという外来語が導入されてからは、Volk やその意味で用いることはなくなつたといふことである。逆に、アーデルンクによれば、「Volk は政治的結合体を表すことがあって、それは、ある君主のものに立つ限りでの多くの人——かりにそれが異なる種族(Stämme)、言語のものであっても——を指す」とある。しかし、アーデルンクによれば、「Volk とはほとんど国家臣民に近い意味で使われるることもあることを指摘する。

しかし、アーデルンクにとって、この語法はドイツ語の正しい用い方とはいえない。極めて興味深いことに、アーデルンクは Volk のほかに Völkerschaft という集合名詞をとくに取り上げて説明し、「多くの割合小さい親縁的な Völker を全体としてとらえる」ときの用語、または「多くの Völker ないし Stämme から成るような Volk を表す」語としては、folk である。

よりぬいからの方を用いるよう推奨する（例えば

Französische Völkerschaft, Tatarische Völker-schaft）。かれによれば、この語は既に近年になって導入されたもので、folkと「多義的で、しかも大抵の場合に蔑みのニュアンスを含む言葉を避ける意図がそれを促したのだろう」というのである。ただ、同時に、かれが「フランス人」を表すのに das Französische Volk という表現を断固拒け、Französische Völkerschaft に固執すると、かれの頭には民族・帆船船員であるにもかかわらず单一国民をなすフランスのナシオンというものがあつて、そうした実体を的確に表現できるドイツ語の探求が試みられていた」とだけはまず間違いなかろう。

さて、アーデルンクの辞典第一版に遡ること数年にして、これから最後に考察する J·H·カンペの『ドイツ語辞典』全五巻が刊行される。⁽¹⁷⁾ それは、時あたかも大革命・ドイツ帝国の崩壊という政治的激動期にあたり、また、カンペ自身の鋭敏な時代感覚ともあいまつて、われわれはそこから、社会・政治的概念に關イツ人を呼ぶのに Volk なる名辞より適切である」と。ただ、ドイツに住むオーストリア人、バイエルン人、ボヘミア人、ザクセン人、プロイセン人などを念頭において Deutsche Völkerhaften と複数形を使う人があるけれど、この語法は、それ自体すでに集合名詞であるこの語の誤用であつて、あくまでも Deutsche Völkerschaft でなければならない、というのである。つまり、カンペによれば、「一つのfolk」と表現するには出来ず、より適切には「folkolk」か「folkolk体」と書うべきものだ、と診断されてゐるわけである。

そして、こうした現状把握と概念理解は、Volk という語の説明において、この上なく明瞭に定式化される。カンペは、Volk という語の極めて多様な意味を考察した後、最後に、その重要な語義として、folkとは「多くの人から成る全体であつて、同一の政府のもと、一つの国制の中で生活し、通常は同一の言語を話すもの」を指すと、う指摘をする。folkが、アーデルンクの類似の規定よりいわば非身分制的・国

一橋論叢 第110巻 第4号 平成5年(1993年)10月号 (142)

退け固有のドイツ語に執く立場を貫いていたため、例えは、われわれの関心対象である Nation なる語は端的に切り捨てられてしまう。それに反して、Volk 系統の語についてのカンペの考察は極めて興味深い内容を含んでいる。

全体としてアーデルンクを強く意識するカンペは、第五巻(一八一一年、四三三一四頁)に Völkerschaft の項をたて、部分的にはアーデルンクをそのまま使いつながら、しかし、それとは異なってドイツの現実をはじめ引照しながらの語を扱う。すなわち、「多くの小や、Völker または Stämme からなる Volk」と Völkerschaft の語義を定めた後、カンペは、この述べる。「ドイツ人、すなわち国制の不備ゆえに、確かにある全体にはまとめられているものの、個々のドイツ部分の異なる国制、政府等々により、相互にかなり異なる疎遠な部分をなしているドイツ人が、しばしば Völkerschaft と呼ばれている。」この名辞はまた、ト

民的にとらえられているといろも田につく点であるが、それはともかく、これがカンペによるfolkの語義説明の最後であつて、「民族」の意味でのそれが終に登場することはないと、うことだけは、しっかりと確認しておかなければならぬ。カンペによれば、エジプト、インド、ギリシア、ローマのfolkが云々されて来たのは右の意味においてであつて、人々はまた、近くは同様の意味で「しばしば〔正当に〕イギリス、フランス、スウェーデン、スペイン等々のfolkを語り、読む」。しかし、残念ながら、ドイツのfolk(Deutsches Volk)だけは「まだ」欠如している。そして、われわれはそれがじつは日本がドイツ帝国(Deutsches Reich)の廃墟から立ち現れるのを期待しなければならないのである。Deutsches Volk は、まさに将来実現されるべき「予示概念(ロゼンック)」に止まつてゐるのである。

本稿の始めに引用したアールントがそれに呼びかけ、まだ、フィヒテがナチオンという言葉のあとでそれに語った「民族」としての „deutsches Volk“ は、一八世

するかなり時代同調的な情報を期待することができる。

ただ、カンペは、辞典編纂の大方针として、外来語を

- ‘レザーハーグの歴史’ Allgemeine Deutsche Biographie. Leipzig (1875), Bd. 1. S. 80-84. (Scherer). 参照。
- (15) Wördehoff, Bernhard, Sind deutsche Juden Deutsche? in: Die Zeit, Nr. 22, 28. Mai 1993. S. 74.
- (16) Adelung, op. cit. 3. Theil, (1798), Sp. 439 f.
- (17) Campe, Joachim Heinrich, Wörterbuch der Deutschen Sprache. 5 Bde. Braunschweig (1807-1811). Neudruck mit einer Einführung und Biographie von Helmut Henne, Hildesheim (1969).
- ‘ルバウムの歴史’ Allgemeine Deutsche Biographie. Leipzig (1876), Bd. 3. S. 733-737. (G. Baur). 参照。
(1876年 十四)
(#日本大辞典・大英大辞典)